

ちょっと ブレイクしませんか？

第

6

回

プロヴァンスの贈りもの

イソップ物語に「肉を運ぶ犬」という小話がある……

犬が肉を銜(くわ)えて川を渡っていた。水に写る自分の影を見て、てっきり別の犬がもっと大きな肉を銜えているのだと思って、自分を捨て、相手のを奪ってやろうと飛びかかったが、両方を失っただけだった。一方は、元々ないので届くわけがなく、他方は、川に流されて行ったのだ。

映画「プロヴァンスの贈りもの」(06年 米国)は、市場原理主義の愚かさをユーモラスに語りかける作品だ。ロンドンで敏腕マネートレーダーとしてリッチな独身生活を送るマックスのもとに、南仏プロヴァンスに住むおじのヘンリーの訃報が届く。子どもの頃、夏休みを共に過ごしたヘンリーおじさんが教えてくれた生きる知恵のお陰で、今日の成功があるのだったが、すっかり都会生活に浮かれて不義理を続けていた。マックスは、叔父の遺産である館(シャトー)と葡萄(ぶどう)園を相続することになり、数十数年ぶりに南仏を訪れる。拝金主義者マックスは最初からお金の算段ばかりで、館は古びて資産価値は予想を遙かに下回っていたために売り払う決意をする。と思った矢先に、おじさんと一緒に葡萄畑の手入れをしてきた農夫の激しい抵抗にあう。ある日おじさんを父親だと名乗る米国娘が現れる。マックスは遺産相続のライバルと勘違いして追い払おうとやっきになる。金に目がくらむと人を見る目も邪になってしまう。そんなマックスも食卓に出るワインの中に、美味なる一品があることが気がかかっていた。二束三文の価値しかない鑑定人に宣告された葡萄畑の一角に石を敷いた葡萄こそがおじさんが大切に守り続けた幻の



ワインのルーツであることを農夫から教えられ、マックスは心を改める。ほのぼのとした南仏の田舎町を舞台にして、ヘンリーおじさんの本当の遺産に気がついた時、拝金主義を捨てたマックスに平穏で幸せな日々が訪れるのであった。マックスを演じたのは「グラディエーター」でオスカーを獲得したラッセル・クロウ。



このイソップの小話は「二兎を追う者一兎をも得ず」の諺にも相通じていて、世俗の欲望を追いかけてばかりではいけないと説いています。事実ギャンブルで大勝ちしても心はずさんで、残るのは虚しさばかり。マネーゲームでVDT端末の数字ばかりを眺める生活と、のんびりした田舎の暮らし、皆さん老後はどちらを選択されますか。荒野のような心理状態から脱するヒントも与える印象的映画でした。

精神科医・映画評論家

かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授